人間学講話

経世の書 呂氏春秋を読む

安岡正篤
Masahiro Yasuoka

安岡正篤

人間学講話

経世の書 呂氏春秋を読む

致知出版社

著者略歴

安岡正篤（やすおか・まさひろ）

明治31年大阪市生まれ。大正11年東京帝国大学法学部政治学科卒業。昭和2年財金鶏学院、6年日本農士学校を設立、東洋思想の研究と後進の育成に努める。戦後、24年師友会を設立、政財界のリーダーの啓発・教化に努め、その精神的支柱となる。その教えは人物学を中心として、今日なお日本の進むべき方向を示している。58年12月死去。

著書に『日本精神の研究』『いかに生くべきか——東洋倫理概論』『王道の研究——東洋政治哲学』『人生、道を求め徳を愛する生き方——日本精神通義』『経世瑣言』ほか。講義・講演録に『人物を修める』『易と人生哲学』『佐藤一斎「重職心得箇条」を読む』『青年の大成』などがある（いずれも致知出版社刊）。

経世の書「呂氏春秋」を読む

平成二十二年三月三十一日第一刷発行

著者　安岡正篤

発行者　藤尾秀昭

発行所　致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前四の二十四の九

TEL（〇三）三七九六—二一一一

印刷・製本　中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。（検印廃止）

©Masahiro Yasuoka 2010 Printed in Japan

ISBN978-4-88474-879-1 C0095

ホームページ http://www.chichi.co.jp

Eメール books@chichi.co.jp

新装版刊行によせて

このたび致知出版社が『天地にかなう人間の生き方―経世の書「呂氏春秋」を読む―』を新装改訂して『経世の書「呂氏春秋」を読む』として刊行された。

本書は、はじめ『東洋思想の一淵源〈経世の書・呂氏春秋〉』として昭和四十二年三月に関西師友協会創立十周年記念にあたって同協会から出版され、その後平成九年致知出版社より刊行された経緯がある。

これまで私は本書を時折読みかえしては琴線にふれる愛読の書としているが、冒頭父は次のように書き出している。

『呂覧』はシナ古典の中でも最も基礎的な、そして代表的な文献の一つであります。『史記』などではこれを『呂氏春秋』と申しておりますが、原名は『呂覧』でありまして、先秦文化のエンサイクロペジアとも言うべきものであります。

秦の始皇帝などの出現しない前の、古代民族の宇宙観・自然観・人間観というものが実によくまとめられてある。後世の思想・学問の多くに、これが流入していると申してよろしい。—省略—少なくともこの『呂覧』や『淮南子』を読まなければ、後世のものを読んでも、それは川の本流を究めずして、いろいろの支流に遊ぶのと同じような感じがするのであります。

人間の根本問題は、まず己を徹見し自ら反らなければならない。それがあらゆる哲学・宗教・道徳の根本だと儒学は説いている。古典の読み方も「川の本流を究めずして」と同じで、古典中の古典といわれる本書を読むことによって東洋民族の人間観・自然観を理解すべきであろう。

とくに印象に残っている文章をいくつか採りあげてみる。

「太上は諸を己に反す。其の次は諸を人に求む。其の之を索むること弥々遠ければ其の之を推すこと弥々疏に、其の之を求むること弥々彊き者は之を失ふこと弥々遠し」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間個人のあり方も国家・政治のあり方も根本的には同じことといえる。

「呂太公望、斉に封ぜられ、周公旦・魯に封ぜられる。二君は甚だ相善し。相謂うて曰く、何を以て国を治むる。太公望曰く、賢を尊び功を上ばん。周公旦曰く、親を親しみ、恩を上ばん。太公望曰く、魯は此れより削られん。周公旦曰く、魯は削らると雖も、斉を有たん者亦必ず呂氏に非ざるなり」

孔子は、常に周公旦を夢に見たというほど尊敬していた。『論語』を学ぶことからさらに古典に遡って『呂氏春秋』にふれれば東洋人間学の淵源が一層理解できるのではないだろうか。そこに古典を読む楽しさもある。

本書は精神的混迷の中に生きる我々に、人間学の原理、また経世の要諦が精選されており、覚醒の書として是非多くの方々に読んでいただきたい佳書と確信している。

最後に本書の新装改訂版の刊行にあたってご好意をいただいた致知出版社の藤尾秀昭社長、専務取締役柳澤まり子編集部長、編集部番園雅子氏に深謝申し上げたい。

平成二十二年三月

（財）郷学研修所・安岡正篤記念館
理事長　安岡正泰

旧版　はじめに

本書は昭和四十二年三月、関西師友協会創立十周年記念として同協会より出版されたものである。当初の題名は『東洋思想の一淵源』であった。それから三十年の歳月を経て、題名も装いも改めて、致知出版社より刊行される運びになったことは慶賀の至りである。

本書の内容は、秦の始皇帝の宰相として著名な呂不韋の編著『呂氏春秋』をテキストとして、安岡正篤先生が久保田鉄工株式会社（現株式会社クボタ）の幹部社員に五回にわたって講義されたものの講録である。当時のわが国は総評や全学連が幅をきかせていた時代で、二月十一日を建国記念日として立法化することに対して、反対運動が盛んな年であった。

『呂氏春秋』は別名『呂覧』と呼ばれ、秦の始皇帝以前のあらゆる思想を集大成した膨大な書であるが、安岡先生はその中から、現代のわれわれに適切と思われる名言、佳句を選ばれて、分かり易く講義されている。

人間学の原理、経世の要諦等、大部のものではないが読めば読むほど味わい深く、まさに活学に資すべき書である。

現下のわが国は人心荒廃し誠に憂うべき状況であるだけに、本書の上梓が世に裨益するところ甚だ大なるものありと確信し、はじめのことばとする次第である。

平成九年五月

関西師友協会会長　新井正明

経世の書「呂氏春秋」を読む　目次

新装版刊行によせて　安岡正泰　1
旧版はじめに　新井正明　5

第一講　私欲を去り、公に尽くす

東洋の自然観、人間観　14
天の道、地の理、人の紀　19
真の生き方　22
私欲を去って、公のために　26
平和のもとは公である　31
己にかえれ　39

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二講　まず、わが身を治める

古典に親しむ　42
欲望を節する　45
生命を知り、もとにかえる　54
天下を治めるより、まずわが身を　60
人物を観察する　63
八つのことを観る　64
六つのことをためす　68

第三講　学び、教え、厳粛になる

根本にかえる　74
学ぶことが大切　78

わが身になって教える　86
教育の六つの眼目　92
賞罰が大切　100
攻めるのは救うため　107

第四講　本質と人物を知る

政治も事業も人である　116
まず本質、生命を知る　122
ピントをはずさない　126
賢者を尊重し、恩を大切にする　132
人材を求める　139
人を持つ　142
人間の心理を知る　146

第五講　乱れ亡びる国を興す

乱れる　152
興る　152
直言の徳　153
時機が到来する　154
亡ぶ者　159
亡ぶ理由　160
信じ合えて親しめる　164
悪賢い人間を排除する　165
信があれば、うまくいく　167
本質にかえり、真に生きる　168
旧版あとがき　河西善三郎　173

装　幀　川上成夫
編集協力　柏木孝之

第一講

私欲を去り、公に尽くす

東洋の自然観、人間観

『呂覧』はシナ古典の中でも最も基礎的な、そして代表的な文献の一つであります。『史記』などではこれを『呂氏春秋』と申しておりますが、原名は『呂覧』でありまして、先秦文化のエンサイクロペジアとも言うべきものであります。

秦の始皇帝[1]などの出現しない前の、古代民族の宇宙観・自然観・人間観というものが実によくまとめられてある。後世の思想・学問の多くに、これが流入しておると申してよろしい。

この書物に次いでつくられた似たようなものが、漢代にできた『淮南子』[2]という書物で、これはどちらかと言うと、『呂覧』の方がより一般的であるのに対して、より多く老荘的（黄老的）であります。少くともこの『呂覧』や『淮南子』を読まなければ、後世のものを読んでも、それは川の本流を究めずして、

（1）　あとがき参照。

（2）　前漢、淮南（わいなん）王劉安（りゅうあん）の編著。二十一巻。食客数千人による思想・風俗・地理等の一大百科辞書ともいうべき書物、道家思想が全体を貫いている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com